



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

1997年1月31日

AJEL

№60

1. 理事会報告
 2. 研究部会報告
 3. 海外ラテンアメリカ研究センター
紹介 (19)
 4. 事務局から
- 寄贈図書に移転・保管について
○第18回定期大会 研究発表および
パネル・ワークショップ募集の
お知らせ

1. 理事会報告

○第78回理事会

日 時：1996年12月7日(土)

場 所：上智大学

出席者：松下理事長、幡谷、細野、小林、国
本、中川、中牧、西島、田中、畑
(書記)、委任：遅野井、辻

1. 前回議事録を確認した。
2. 年報編集委員、会報編集委員、研究部会
担当委員から活動報告があった。
3. 事務局所有の寄贈図書、年報バックナン
バーなど(現在筑波大学細野研究室に段ボ
ール40数箱分を保管)の管理方法の変更
について検討し、寄贈図書・論文抜刷に
関しては、機関による一括受け入れおよび
会員利用の便宜を条件に受け入れの希望
を募ること、年報バックナンバーに
関しては、一部保存用を除いて、古書業
者などを通して一括セット販売を
目指すことが承認された。
4. 理事選挙規則改正によって、前回理事
選挙では中部・西日本・東日本の間で
被選挙権格差が生じ、また理事会開催
のための交

通費支出増という財政的な問題も生じて
いる。これらを改善するために、検討委員
会(松下理事長、中牧、西島、小林、辻各
理事)を組織し、97年3月の次回理事会
までに原案を作成し、同年6月の定期総
会に改正案を諮ることが了承された。

5. 次期定期大会の組織委員会の委員に
ついて、理事会の委員として、中川文雄・
田中高理事を追加し(国本二委員長、幡
谷、畑は前回の理事会で承認済)、さら
に浅香幸枝、狐崎知己、三田千代子、
志柿光浩、田島久歳、谷洋之、内田
みどり、浦部浩之、柳沼孝一郎の各
会員に委員を依頼することが承認され
た。

寄贈図書に移転・ 保管について

本号の理事会報告でお知らせしている
ように、これまで細野昭雄元理事長のご
厚意で、会員の方々から寄贈された図書
・論文抜刷など段ボール40数箱分を同研
究室に保管していただきましたが、
理事会決定により、受け入れ・管理して
下さる機関を募集することになりました。

- (1) 個人ではなく機関であること
- (2) 一括受け入れとすること
- (3) 学会員の利用に際して便宜を図る
こと

が条件です。受け入れてもよいとお考え
の機関がありましたら、2月末までに学
会事務局までご連絡賜りますよう、お願
い申し上げます。

6. 「日独シンポジウム」(1997年3月20～22日にベルリンで開催)への松下理事長の出席を承認した。(本学会が共催者となることについては1996年4月の理事会で承認済)
7. 新入会員4名、退会希望者4名を承認した。
8. 研究年報の広告掲載について、次号では掲載しないことが了承された。

学会費の二重請求のお詫び

6月の定期大会における学会費納入者リストが、民博から神戸大学に郵送される際に紛失したため、懇親会参加者リストなどを基に、未納者に対する会費の請求を行わざるを得ませんでした。その後、郵便物は神戸大学の郵便処理のミスで、別の所に保管されていたことが判明致しましたが、この間一部の既納者の方に請求がいったしまったことを深くお詫び申し上げます。

日本ラテンアメリカ学会事務局

2. 研究部会報告

○中部日本部会

1996年11月30日(土)、1994年4月開学の美しい自然環境に恵まれた鈴鹿国際大学において研究部会を開催した(出席者9名)。研究部会は当日午後2時より6時まで以下のように2つの報告が行われ、活発な議論が展開された。立岩氏による第1報告は、植民地史研究の空白部である17世紀ヌエバ・エスパーニャの統治状況を、メキシコ市参事会の性格、機能の分析を通じて考察するという意欲的かつ詳細な報告であった。富田氏による第2報告は、途上国のインフォーマル・セクターの課題を典型的に抱えているペルーのケースを、同氏が最近実施したペルーにおける小零細企業の調査に基づき明快に分析した示唆に富む

報告であった。報告の要旨は以下のとおりである。(武部 昇、牛田千鶴)

○第1報告：17世紀ヌエバ・エスパーニャにおけるスペイン統治浸透の諸相とメキシコ市参事会の役割に関する試論—メキシコ市参事会議事録に見る聖イポリト祭準備を通して—

立岩礼子(南山大学)

本報告では16世紀の征服史、18世紀の改革史、19世紀初頭の独立史に比べ、その重要性にもかかわらず看過されてきたきらいがある17世紀に焦点を当て、特にヌエバ・エスパーニャ副王領首都メキシコ市の行政にあたったメキシコ市参事会の立場から本国に対する植民地の忠誠がいかなるものであったかを解明し、この時期のスペインによる植民地統治の状況を浮き彫りにすることを試みた。史料は主として旧メキシコ市参事会歴史古文書館所蔵のメキシコ市参事会議事録を用いた。

この参事会はメキシコ市の整備や住民の安全や生活の安定を図る一方、ヌエバ・エスパーニャ副王領首都の威信をかけてスペイン王室関連の祝賀式典(国王即位および葬儀、皇太子誕生、王族の結婚および葬儀など)、副王および大司教の離着任式、聖体の祝日、聖イポリト祭(メキシコ征服記念日)などの儀式を執り行い、その準備に膨大な費用をつぎ込んだ。本報告では特に聖イポリト祭を取り上げ、祭開催に際して参事会が直面した諸問題を明らかにした。この祭の最大の催しは毎年8月12日夜とその翌日13日に行うel paseo de pendón(王旗掲揚行列)及びその後プラサ・マヨールで数日間にわたって行われた祭、とりわけ馬上槍試合と闘牛であった。こうした祭は国王崇拜を促すだけでなく、祭の主催者である参事会の権力を誇示する重要な場と化していた。しかし一方で祭は多額の出費を要し、慢性的な財政難に苦しむ参事会の財源を圧迫したほか、参事会議員個人の出費をも必要とした。参事会が副王の意向に反して祭

の規模を縮小し、また数年間にわたって中止したこともあった。すでに1620年代には王室や本国の大貴族に資金援助を要請する事態にまで発展していた。

この事が参事会の国王に対する忠誠心の低下を示すと結論付けることは早計であるにしても、祭開催を通じてクリオーリョ主体で構成されていたとされる参事会と本国との関係の弱体化を指摘することは可能であろう。今後はメキシコ参事会の財政問題に言及するとともに、参事会と教会および副王との関係から考察を継続していく。

○第2報告：ペルーにおける小零細企業

振興の問題—リマの事例を中心に—

富田 与（四日市大学）

ペルーは構造調整を導入したことで極めて高い経済成長を達成した。しかし一方では深刻な雇用問題が生じており、今日のインフォーマル・セクター振興は雇用創出をその重点課題としている。リマにおけるインフォーマル・セクターの形成は、「工業化以前」（1950年代まで）、「工業化なき都市化」（1960—1970年代）、「失われた10年」（1980年代）、そして「構造調整期」（1989年以降）の4期に大別でき、「失われた10年」以降には、「避難所的」及び「企業家的」インフォーマル・セクターという性格の異なる2つのグループに分化していたことが観察される。資本集約度の向上と規制緩和という生産性の問題にデ・ソトの主張を継ぎ木した従来の政策に加え、①フォーマル・セクターからの流入により生じた避難所的インフォーマル・セクターの雇用のミスマッチの解消、及び②企業家的インフォーマル・セクターの輸出指向型産業構造への参画が今後の政策課題とされる。

○西日本部会

1996年11月30日（土）立命館大学において、西日本研究部会が開催された。東京や福岡からの会員も含めて16名が参加し、中牧会員の

司会のもとで充実した研究会であった。

小澤会員による第1報告では、コスタリカの1983年の中立宣言に関して、その中立主義が反共主義に根ざした政治的意図のもとになされたという指摘が興味深かった。報告はコスタリカの「国民意識」の形成を軸に、1870年以降の政治経済史が概観され、質問も多岐にわたった。

齋藤会員による第2報告は、ボリビアの—地方を事例として先住民がキリスト教に改宗していくメカニズムを解明しようとするものであった。報告者の用語で言うと、宣教師の言動に対し、先住民は当初の嘲笑から、しだいに感動し模倣に至る。感動を引き起こすものは、演劇的な儀礼であったり、宗教音楽であったり、またガラス玉などの贈与であったりする。これは現代の宗教のあり方にもつうじるものであり、示唆的である。以下は各報告者による報告要旨である。（辻 豊治）

○第1報告：コスタリカの中立宣言を めぐる国際関係と国民意識

—モンヘ大統領の政策を中心に—

小澤卓也（立命館大学）

コスタリカ人の国民意識には、西欧（特に米国）民主主義への憧れ、反軍国主義、第三世界との連帯意識が混在していた。そして、行政側もこれらを尊重し、非常に多彩な外交を行っていた。しかし、ニカラグア革命を契機に中米地域における米ソ東西対立が激化するようになると、コスタリカ国家は従来の外交を修正して米国側に立ち、ニカラグア及び共産主義陣営と対立せざるを得なくなった。これは、危機的状況にあった国家経済を建て直すために米国の資金援助が不可欠であったこと、また、国内において反共主義者の運動が高まった結果であった。このような状況下で、大統領に就任したのがルイス・A・モンヘである。だが、反共産・反ニカラグア勢力の過激化につれて、モンヘは国内世論の分裂やコスタリカの国際的威信の失墜を危惧し始

め、1983年11月、国内外の問題を同時に解決する新たな政治・外交政策として中立を宣言することになる。

この中立の最大の特色は、戦争行為に対しては中立であるが、イデオロギーや政治論争においては中立を意味しないとする「積極的中立」と、軍隊を放棄し、集団安全保障条約によってのみ自国の安全を維持するという「非武装中立」である。前者は欧米民主主義の肯定を意味していたため、共産主義陣営から非難されることになるが、後者は、多くのコスタリカ民衆の反軍国主義精神を満足させるものであっただけでなく、国際的にも高く評価されるようになった。さらに注目すべきことは、モンヘがこの極めて政治的な中立政策を社会的に正当化するために、恣意的な虚構を多く含んだ「国民史」を引用しながら、中立があたかもコスタリカ国民の善良な性質に由来しているかのように描いたことである。

その後、このような「国民文化の現れとしての中立」というイメージは、新聞などの大衆メディアを通じて効果的に社会へ浸透し、多くのコスタリカ人読者のナショナリズムを強く刺激して、彼らを中立支持派へと変えていった。また、これに伴って、国内外の対ニカラグア強硬派の動きが抑制されることになったことは言うまでもない。こうしてモンヘは、コスタリカの政治・経済・社会を大きく動揺させていた中米紛争から脱出し、国際的な信頼を回復したばかりか、内政的危機から脱出することにも成功したのである。

○第2報告：嘲笑から感嘆へ

一植民地期アマゾンにおける

イエズス会ミッションの形成一

齋藤 晃（国立民族学博物館）

本発表では、17世紀後半、現在のボリビアのモホス地方において、ミッション建設を目指すイエズス会士と、彼らを迎えた先住民が、互いに相手を模倣し、その模倣を通じて相手を操作しようとしたありさまが分析された。

イエズス会士は先住民の村に居を定め、先住民の言葉を話し、先住民と同じ生活を送った。もっとも彼らは、先住民文化に対する批判的立場を崩さず、異文化理解を通じて自文化を相対化する危険を冒すことはなかった。他方、先住民は好奇心に駆られてイエズス会士が実演するカトリックの崇拜を模倣したが、彼らの場合、西欧文化の模倣はそれへの感嘆の念に裏づけられていた。この感嘆の念ゆえに、先住民は西欧文化との批判的距離を維持しえず、それに飲み込まれることになってしまった。

当時のイエズス会士は、異教徒の改宗を芸術作品がその鑑賞者に与える審美的効果と並行関係にあるものと見なしていた。そして、その審美的効果の核心にあるのが感嘆だった。それゆえ修道士は、カトリックの儀礼の演劇的上演や教会のきらびやかな装飾で、先住民の改宗を促そうとした。他方、先住民にとって西欧文化は、教会の巨大な建物や牛や馬などの大型動物、金属やガラスの装身具など、その審美的属性ゆえに感嘆すべき事物に満ちていた。そして、それらへの感嘆の念は、それらを所有したいという欲望をかき立てた。彼らにとってキリスト教改宗は、それまで知られていなかった強力な神の溢れるばかりの恩恵に浴することであり、布教村に移り住むことは、そこにある感嘆すべき事物の一切を占有することだった。それゆえ彼らは、自文化を捨ててまでも、キリスト教徒になってしまったのである。

○東日本部会

1996年11月16日、上智大学にて開催。

東日本部会は、料理、美術、音楽といった文化的なイシューを題材に、各国の文化・社会史にアプローチする3報告が揃った。出席者も21名と多く、活発な討議が繰り広げられた。ラテンアメリカ研究における文化的アイデンティティをめぐる議論は普遍的かつ今日的なテーマであることが改めて認識された。

以下は各報告要旨である。 (幡谷則子)

○第1報告：「ペルー料理」の成立を

めぐる社会史—国民文化概念の再検討—
山脇千賀子 (筑波大学大学院)

本発表では、国民文化としての「ペルー料理」がいかに形成されてきたのかについて、特にいわゆる「マイノリティ」が歴史的に果たしてきた役割に注目しながら分析した。その際、「国民」、「国民文化」といった概念が近代世界の構成要素でありつつ、その中身はたえず形成途上にある動態的性質をもつことに注意する必要があることを強調した。

具体的分析では、植民地期より確立されてきたクリオーリョ料理の特質、共和制下で強まった非スペイン系ヨーロッパ食文化（特にフランス・イタリア）の影響、およびクーラーの大規模導入にはじまる中華料理の「ペルー化」について扱った。国民形成過程において「マイノリティ」として位置づけられたアフリカ人、中国人などの存在が現在のペルーの食文化を活性化させてきた点を指摘した。

○第2報告：野外美術学校—メキシコ

革命後の再建期における大衆美術教育—
北岸 団 (獨協大学)

野外美術学校は、メキシコ革命勃発の2年目にあたる1913年に国立美術学校でのストライキを契機に反アカデミズム的な画家養成学校として成立する。しかし、その後の反革命期を経て1920年から始まる国家再建期に壁画運動など他の文化国家主義的な美術運動とともに復活する。復活後は、画家養成所の機能に加え、近隣の先住民子弟を中心とする大衆層の絵画学校の役割も果たすが、次のカイエス政権下では大衆美術教育機関としてさらに躍進して3校の系列校が誕生し、正規の美術教育を受けていない子供たちが学校の自由体制のなかで多くのすぐれた美術作品を生みだし、国内外の画家や美術評論家の注目を浴びることになった。革命政権の文教政策の方向

に正当性を与えたという点でこの学校はその後にも政府の支援をうけ、マキシマート時代には10校を超える系列校が成立するものの、政府の美術方針の転換などの理由で衰退してゆき、1936年に消滅する。

○第3報告：アフロ・ウルグアイ音楽にみる
ナショナル・アイデンティティ

西村秀人 (東海大学)

ウルグアイは、人口の大半がヨーロッパ系で占められ、黒人とムラートは合わせても2%に満たない。しかし、同国を最も特徴づける音楽としてカンドンベという黒人系のアフロ・ウルグアイ音楽が存在している。

「カンドンベ」のルーツは植民地時代に行われていた黒人の宗教儀式である。1800年代後半には、娯楽的な要素が強まり、また黒人とヨーロッパ系移民の混血が進んだため、本来の宗教儀式としてのカンドンベは衰退していった。同じ頃非黒人系の人々がカンドンベの模倣をしてカーニバルに登場、その音楽にも黒人性が取り入れられた。1900年には黒人グループもカーニバルに参加し、カンドンベは宗教儀式的名称からカーニバルで使われる3種類の太鼓とその音楽を指す名称となった。

一方、ウルグアイではスペイン色の強いフォルクローレや、都市音楽のタンゴも広く親しまれている。しかしこれらはいずれも隣国アルゼンチンと共通する部分が多く、同国のレコード会社による市場独占にあって、ウルグアイ人アーティストが自国で活躍できるようになるのは1960年代に入ってからであった。

こうした状況下でウルグアイ人音楽家は強くナショナル・アイデンティティを求める傾向を持った。ウルグアイで少数派黒人の音楽が幅広く取り入れられるようになった背景は、アルゼンチンとの文化的差異を強調することでナショナル・アイデンティティを志向しようとした音楽家の方向性にあつたのである。

3. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (19)

南アフリカ大学ラテンアメリカ研究センター

UNISA Centre for Latin American Studies (UCLAS)

去る8月、筆者はナミビアとアンゴラに旅した。往復ともヨハネスブルグ経由、しかもナミビアと南ア共和国の間柄はパナマと米国のそれを彷彿とさせる。そこで行きがかり上、南アにも目が向く。実際のセンター訪問はかなわなかったため、本来ならば当欄で紹介する資格には欠けるが、会員諸氏がアフリカ南部まで出向く機会が多くないはずなので、周辺事情をも含む報告として大目に見て頂ければ幸いである。

旅の主眼は奴隷貿易ゆかりの地アンゴラにあり、ナミビアは言わばおまけだったが、その独立をめぐり、レーガン米大統領がキューバのアンゴラ撤退との「リンゲージ」に固執したことは周知の通り。ラテンアメリカともあながち無縁ではない。

ラテンアメリカでナミビアに大使館を置くのはブラジル、キューバ、メキシコ、ベネズエラの4カ国(ちなみにアンゴラへは前二者のみ、日本はもちろんどちらにも実館なし)。ブラジル、キューバはともかく、後二者の利害やいかに? 好奇心から訪ねてみたのがUCLASを知る契機となった。

筆者を迎えてくれたのはベネズエラの代理公使 Alberto Valero 氏。ナミビア駐在3年を越える同氏によれば、ベネズエラは独立前より SWAPO (南西アフリカ人民機構-現与党) を強力に支援し、独立ナミビアを直ちに承認、大使館を開いた国のひとつのこと。メキシコと共同運営する大使館を切り盛りしながら、氏は文化・学術交流に力を入れ、英訳版ボリバル伝などベネズエラ紹介書の普及のほか、94年3月にはUCLASの協力を得て、「イベロアメリカとアフリカ」と題するセミナーをナミビア大学で開催した。

さてそのUCLASは、名門南ア大学のロマンス語学科内に84年8月開設された。現所長はブラジル出身の Dra. Zélia

Roelofse Campbell (専門はカヌードスの乱などメシアニズムをめぐる歴史と文学)。所報として UNISA Latin American Report を年2回発行する。小所帯ながら交流活動には熱心とみえ、所報ではラテンアメリカ関係者の南ア訪問を丹念に拾っている。

地域的にはやはりブラジル、アルゼンチンへの関心が強く、南アの現状を反映して体制移行の比較研究やストリートチルドレン問題がプロジェクトの中心を占める。歴史屋の筆者などは、ボア戦争に敗れたボア人のパタゴニア移住を扱った論稿を所報上に見つけ、なるほどと妙に納得する。また所報本文は英語だが、アフリカーンス語、スペイン語、ポルトガル語の要約が付いているのも南アならではである。余談になるが、ヨハネスブルグのポルトガル人街は50万人規模といい、ポルトガル語の新聞も発行されている。ナミビアでは Portuguese と言えば雑貨屋を指し、実態としてはアンゴラ脱出組が多い。

ナミビア名物に、少数「民族」ヘレロ人の女性がかぶるヘッドドレスがある。くだんのバレロ氏は、ベネズエラのカリブ沿岸文化に関する写真集を取り出し、にやりとしながら筆者に中の1枚を示した。そこに写っていた女性の姿はまさにヘレロ女性と瓜二つ。「環太平洋の時代」を否定はしないが、まだまだ大西洋世界にも発掘すべき宝は多い。UCLASの健闘を祈るゆえんである。

なおUCLASの連絡先は

POBox 392

0003 Pretoria, Rep. of South
Africa

Tel. 27-12-4296674 Fax. 4293680

E-mail Roeloz@alpha.unisa.ac.za
(飯島みどり・立教大学)

お詫びと訂正

会報59号6ページ「近著紹介」『否定されてきたアイデンティティの再発見』に、誤りがありました。以下のように訂正させていただくとともに、お詫びいたします。

左列 上から5行目

誤「太平洋岸自治のゆくえ・・・
・幾度か」

正「大西洋岸・・・幾度めか」

下から6行目

誤「歴史的概観および太平洋」

正「大西洋」

下から4行目

誤「太平洋岸の住民の組織」

正「大西洋岸」

右列 上から6行目

誤「筆者が太平洋岸」

正「大西洋岸」

紹介者・編集委員

4. 事務局から

1) 会員住所の変更

第18回定期大会 研究発表および

パネル・ワークショップ募集のお知らせ

第18回定期大会は、本年6月7日（土）と8日（日）の両日、中央大学駿河台記念館を会場として開催されます。会場は中央線・総武線御茶ノ水駅より徒歩2分のところにあります。研究発表希望者とパネル・ワークショップを組織したい方は以下の要領でご応募下さい。

研究発表 (1) 発表題目、(2) 分野（文学・歴史・政治経済等）、(3) スライド、オーバーヘッドプロジェクター、ビデオ装置等の使用希望の有無をハガキに明記して、2月末日（必着）までに大会実行委員会にご連絡下さい。

パネル・ワークショップを組織したい希望者は、テーマと報告者3名以上をハガキに明記して、同じく2月末日までに責任者がお申込み下さい。

第18回定期大会実行委員会

〒192 東京都八王子市東中野 742

中央大学商学部 国本伊代研究室

TEL 0426-74-3644

FAX 0426-74-3651

コ移民100周年」「日本・チリ修好100周年」などにあたり、日本・ラテンアメリカ関係にとって節目の年でもある。月並みではあるが、事件の早期解決と、ラテンアメリカがもっとポジティブな形で日本の社会で注目されることを願ってやまない。 (畑 恵子)

編集後記

年末に起きたリマの大使公邸占拠事件では、知人が人質となり、心配されている会員諸氏も多いと思う。私自身は事件の発生そのものよりも、天皇誕生日祝賀パーティーに驚き、日本政府の対応・マスコミ報道に苛立ち、そして在日ペルー人への嫌がらせに憤った。非常に残念な事件ではあるが、本年は「メキシ

No.60

1997年1月31日発行

〒654 兵庫県神戸市灘区六甲台町2-1

神戸大学国際協力研究科

松下 洋研究室 気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL/FAX 078-803-0856

郵便振替口座 01140-5-89476